タウ蛋白：痴呆症原因分子としての異常性と病態

Tau protein: its molecular abnormality and pathological features in Alzheimer's disease

石田 寿昌[1], 谷口 泰造[2]([1]大阪薬科大学,[2]神戸大学　バイオシグナル研)

高齢化社会を迎え、老年期の痴呆症の解明と治療は医学的にも社会的にも最大かつ緊急の課題であることは言うまでもない。神経変性型痴呆の脳組織に共通する神経病変（タングル）としてタウ蛋白質の脳内蓄積があるかその脳内含量が痴呆度と相関することから、多くのタウ蛋白の研究を惹起してきている。特に、タウ蛋白が微小管結合蛋白であることが証明されて以来、生理的な微小管機能が破綻した結果が痴呆症になるという基本的な概念が確立した。これまでの痴呆症研究から、タウ蛋白の異常リン酸化が同定され、タウ蛋白遺伝子に点突然変異が発見されてきた。しかし、その発症機構については完全には解明されていない。

本シンポジウムは主要な痴呆発症因子であるタウ蛋白質が病理化学的・構造的変化を経てタングル形成に至る過程に関する最新の知見について第一線で活躍されている研究者に講演していただき、タウ蛋白の異常性とは何かについて整理し、痴呆にいたるタングル形成機構の詳細な理解と解明から今後の治療に向けた創薬研究への展望を探ることを目的としている。